
運命のるーれっと廻して

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命のーれつと廻して

【Nコード】

N2284A

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

お笑い系ですな（^^）3つのレモンパイの中で、Aptx4869の解毒剤が入っているのはどれ？

少年探偵団は、阿笠博士が作った新作のゲームソフトのモニターと言っ名目で、

阿笠廷にやって来ていた。

元太、歩美、光彦の3人は、博士とともにゲームに興じたした。

コナンはその様子を離れて見ていた。

すると、哀が他の4人に気づかれぬようコナンを別室に招き入れた。

そこにはテーブルがあり、その上には3枚の皿。

それぞれレモンパイが一切れずつ乗っている。

コナンの見たところ、それぞれのパイは別々の大きなパイから切り取られた物のようである。

哀が言った。

「工藤君、あなたの推理力を試させてくれるかしら？」

このレモンパイは、蘭さん、阿笠博士、そして私が作ったものなの。

蘭さんの作った物には、完成したAPT X 4869の解毒剤が、

博士の物には、自分用に密かに開発中の超強力毛生え薬が入っているの。

さあ、選んで頂戴。

自分の運命を自分の推理で切り開いてみて」

「ふざけるなよ、灰原。

解毒剤が出来たんならさっさと渡せよ！」

「嫌よ。あなたが元の体に戻ったら

黒の組織が狙ってるって解っているても

推理を披露してしまうでしょからね。

私の身にも火の粉が降りかかってくるのは必至。

だから、組織に対抗できるほどの推理力と勇気があるかどうか試させてもらっわ。」

そう言われれば反論が出来ないコナンであった。

気になる事が一つあった。

「灰原・・・、お前の作ったレモンパイには一体何が入っているんだ」

「安心して、毒なんか入れてないから」

哀はそう言つと声を上げて笑つた。

コナンは冷や汗が背中を伝うのを感じた。

コナンは3つのパイを見つめた。

それぞれに、特徴はあるのだが、一体誰がどれを作ったのか見当がつかない。

推理とは綿密なデータ分析から導かれた結論である。

しかし、今回は結論を出すためには、あまりにもデータが少なすぎる。

この試みは推理というより運の強さを試すもののようにコナンには思えた。

哀はコナンを見つめている。

「運の強さも、黒の組織と戦う上で重要さ！しかし、一体どれなんだ。」

「怖かったら、止めたつていいのよ」

見下すように哀が言った。

「ちつくしょう！蘭！お前の勝負強さ、俺に分けてくれ！」

コナンは思い切つて一つのパイに手を伸ばそうとした。

その時、ばたばたと足音がして部屋の中に元太と歩美が入ってきた。

「アゝ！コナンだけ、ずりいぞゝ！」

「おいしそう！」

二人は口々に言つとコナンが止める間も無くパイに齧りついた。

「おいしい！」

二人は同時に声を上げた。

「大丈夫なのか！」

コナンの慌てた様子を不思議そうに歩美は見つめた。

「すつごく、美味しいよ。どうしたの Conan 君」

「良かったわ。喜んでもらえて。」

歩美ちゃんのは、阿笠博士が、元太君のは蘭さんが作ったものなの。昨日私、蘭さんにレモンパイの作り方教えてもらってたら、博士も面白がって参加して作ったのよ」

哀は、にこやかにそう言った。

「へえ、博士って、器用なんだ」

元太はパイをほうばりながら言った。

「おい……。灰原」

Conanは何の変化も無い二人を見て言った。

「あら、あんなつまらない冗談真に受けたの？」

哀は肩をすくめた。

「ほら、Conan君も一緒に食べよ」

緊張が解けたConanは歩美の言葉のままに、一つ残ったパイを口にしました。

レモンの味だけが口いっぱいに広がった。

「アゝ、皆ひどいです」

光彦が入ってきた。

「円谷君、大丈夫よ。まだいっぱいあるから。」

哀は、カーテンの陰からワゴンを出した。

一切れずつ切り取られた丸いパイが3つ乗っている。

「灰原さんが作ったんですか？このパイ」

「私の作ったのもあるけど、食べるのはちよつと待ってね。」

哀は照れたような笑顔を、光彦に向けた。

「健康にいいからと思って、クリームの砂糖を思いっきり控えて、レモンをたっぷり入れたの。」

そしたら、蘭さんが、「ちよつと大人の味すぎる」から、

甘くしたメレンゲかけてもう一度焼くようにアドバイスくれたの。

蘭さんって本当に優しいものの言い方なのね。」

謎めいた微笑を浮かべ、哀はConanを横目で見た。

コナンはレモンパイを口に入れたまま、口にしたものを、吹き出すとする本能と、

「そんなみつともない事出来ない」

という理性がせめぎ合い、身動きが取れなくなっていた。

「じゃあ、卵白泡立てるの私手伝う！」

歩美が元氣よく言った。元太も光彦も賛同する。

ワゴンを押しながらにぎやかに、少年探偵団は部屋を出て行った。出掛けにくるりと元太が振り向いて無常にも言放った。

「コナンもさつさと喰っちまって手伝えよ」

まだ、硬直したままのコナンを残し哀も部屋を出て行こうとした。出口で首だけ振り返るとコナンに話し掛けた。

「研究でちよつと煮詰まってたの。」

でも工藤君で遊べて脳みそリラックスできたわ。あ・り・が・と・う」

（おまけ）

数日後、コナンは少年探偵団とサッカーの待ち合わせで公園に向かった。

灰原もいっしょである。

「へえ、今度はサッカーで脳みそリラックスか」

「たまには運動しないと健康に悪いわ」

こともなげに哀は言った。

「しかし、一体いつになった解毒剤はできるんだ。」

「そんなに、ほいほいできるものだったら、苦労しないわよ。」

大体、あなたはいつも元に戻りたいってこぼすけど、

少しはこの体になった事でいい事を考えてみたらどうなの？」

「ヘッ、せいぜい子供料金で電車に乗れることかな」

「発想が貧困ね。私は生理に煩わされなくてすむからせいせいしているわ。」

もっとも工藤君には分からないでしょうけど」

「灰原、おまえ84にもなつて上がつてないのかよ」

コナンの言葉を無視して哀は言った。

「本当に全然無いの。よく考えてごらんなさいよ」

しばしコナンは沈黙した。

「そういえば、生まれて初めて音楽の時間に褒められた」

「うそでしょう」

意外な返事に哀は絶句した。

「元気よく、歌詞も間違えず歌えましたって。ちよつとうれしかったかな」

コナンはボールをリフティングし始め、哀より一足先に歩き出した。そして哀の方にちらりと首だけ向けるといった。

「本当にちよつとだけだぞ」

そう言くと、コナンはどんどん足を速め、哀は取り残された。

哀はコナンの後ろ姿を見つめながら言った。

「本当はすごくうれしかったのね、工藤君、」

（おわり）

（後書き）

（なんじのたわ言）

これは、以前某掲示板（^^）に書かせていただいた、妄想を形にしたものです。

置いていただいていたサイト様が閉鎖になりましたので、こちらに移らせていただきました。

哀ちゃん、ちよつと意地悪ですね（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2284a/>

運命のるーれっと廻して

2010年10月28日05時31分発行